

佳作

## 職人「親父」

千葉県流山市立東深井中学校三年 佐々木 俊介

ぼくの親父は、人の家をつくる大工です。ぼくは、その四番目の子で、三男坊です。家といえは、一生物なので大工も責任を持って造らなければいけません。

ぼくは小さい頃から、親父のことを見て育ちました。大工の仕事は、結構危ないことが多く、ケガがたえません。親父は、爪がはがれて帰ってきたり、釘が刺さったりすること…。また、大工は、屋根とか高いところにも上らなくてはならないから、落ちたりしたら、ケガじゃ済まないこともあります。

今年の夏、仕事を何回か手伝いました。朝早く出て夜に帰ってくる、それだけですごく疲れます。大工の仕事はきつく、一日でやめたくなくなるような肉体労働です。ぼくが仕事に行った時は、半日で帰りたくなる程でした。仕事は、やっぱり親父みたいになまきかなく、釘打ちもろくにできず、高いところを歩くのでさえ、怖くて、スムーズに歩けなかったりと、ボロボロでした。そんな自分を見ると、全てのことを平然とやってしまう親父は、すごいなあと感じました。

ぼくが、釘打ちをしている時、釘がとび出してしまっていました。でも、そこは、見えないところだし、別にとびでて、手抜きではなく、他の大工さんにとっては普通なのでほっといたら、それを見た親父や兄貴に怒られてしまいました。兄貴には、

「他の大工は、普通にやっていることかもしれないけど、うちは、たとえ見えないところで、釘一本でもとびだしたらダメなんだ。」

と、ぼくに教えてくれました。その時は、まだ「なんで手抜きしてる訳でもなくて、釘とびでるだけでダメなんだよ」と思っていました。

その後、母親から聞いた話では、親父は十五歳で岩手から、こっちに上京してきて、大工になったそうです。ぼくも今年、十五歳です。将来のことろくに決まってもません。そんな自分に比べて、親父は本当にすごいなあと思いました…。だからぼくは、こんなすごい親父に育てられたことを誇りに思います。親父は、まさに「職人」だと思います。

これからぼくは、親に負けないような、立派な大人になりたいです。そして親父が教えてくれた人が見えないところ、見ないところでも、一生懸命やる。そんな大切な心が持てる、最高の大人になるように、頑張りたいと思いました。

